

会長からの メッセージ

「社会からの謙虚な受信と、社会への積極的な発言」をしていくなかで、「会長の顔が皆に見える学会」にすることは重要であると考え、奇数月号に会長から会員、社会に向けたメッセージを伝えるページとして、「会長からのメッセージ」を掲載する。

土木界が激しく変化しているいま、このページを通じて、われわれの学会の会長が何を考え、どこを目指しているかを知っていただき、各会員が今後の土木界を考えるきっかけとしていただきたい。



季節を感じる日本の風景

土木技術と総合性

土木学会第96代会長

栢原英郎



「会長からのメッセージ」を私が執筆するのは今回が最後である。1200字のなかで考えを

明確に伝えることの難しさを知ったが、毎回何人かの方から声をかけていただいた。なかでも「会長の存在を身近に感じるようになった」という言葉が嬉しかった。その功績は編集委員会にある。このページを企画してくださった委員長をはじめとする編集委員会の皆様に心から感謝を申し上げます。

私の最後の機会に、最近強く感じていることをお伝えし、変化を期待したい。

この2年間ほど、会長としてあるいは個人的にさまざまな学会や報告会に参加をさせていただいた。そして、土木工学という総合性を特徴とする分野にもかかわらず、そこで追求されるテーマがあまりにも細分化されていて、全体像が見えなくなっているのではないかと不安をもった。自らが長く身を置いてきた交通、

計画などの分野に限っても、発表されている研究成果を聞く限り、こうした訓練を受けた者が、地域計画や国土計画の策定作業の

なかで現象の分析やパーツをつくることはできても、時代の先を見通して創造的、主導的な役割を果たすことができるだろうかという不安である。

確かに学問の進歩、技術の発展は細分化により達成されてきたところが大きい。1879(明治12)年に発足した工学会は、そ

の後工学系の学会が次々と独立していき、現在の日本工学会に所属する学協会だけでも100近くになっている。昨秋の大韓土木学会における日下部副会長の講演では、1949年に10であった東京工業大学の学科数が現在では45になっていることが紹介されていた。細分化は進歩の一つの姿

ではあるが、全体像が見えなくなつては結果を誤る危険性が高い。たとえば、構造力学の講義がいかに精緻になったとしても、それを応用してつくり上げられる橋梁やダムの全体像に対する知識や感覚が教えられないとしたら、構造力学という学問分野は進歩しても自然と一体となった構造物を造りあげることができない。

初代の土木学会会長である古市公威博士は、1915(大正4)年の第1回土木学会総会に

おいて、「土木学会の会員は、他の分野の成果を総合してことに当たるのだから指揮者としての素養がなくてはならない。他の分野の技術者を指揮する能力を持たなくてはならない」という趣旨の講演をしたと記録されている(土木学会『古市公威とその時代』)。改めて、土木工学の魅力が語られる必要を感じる。学問の成果を利用してつくり上げられる構造物の全体像や、それが人びとに何をもたらすのかが教室で教えられ、研究発表会の場で語れることが必要である。

そう考えて、自らにできることとして昨秋『日本人の国土観』を出版した。このテーマを選んだのは、われわれの活動の舞台である国土という全体からものを考える楽しさを少しでも伝えたいと思ったからである。幸い評判は高いが、売れ行きはさっぱりである。